

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(B)（特設分野研究）

研究期間：2017～2022

課題番号：17KT0063

研究課題名（和文）語り継ぐ存在の身体性と関係性の社会学 排除と構築のオラリティ

研究課題名（英文）The sociology of narrative presence: Exclusion and construction

研究代表者

関 礼子（SEKI, Reiko）

立教大学・社会学部・教授

研究者番号：80301018

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 14,500,000円

研究成果の概要（和文）：戦争や公害など、負の記憶は語り難い。沈黙に抗って異議を申し立てる声がフォーマルに語られ、文字化されると、経験が持つ意味は共有され、社会にとって有意味な公共の記憶となる。だが、こうした運動のオラリティは、社会的に受容され、「型」として固定化されることで、次なる語りを阻んでしま

う。本研究は、オラリティの時代・社会拘束性に着目し、その真性性と流動性を組み替えていくダイナミズムを具体的な現場に基づきながら明らかにした。また、そのダイナミズムこそが、未来の歴史のためのコモンズでありうることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オラリティが私的であると同時に間主観的で、公共的な記憶としてたちあられる。本研究では、発話行為の力、オラリティとリテラシーの乖離、オラリティとリテラシー自体が孕む排除と構築について明らかにした。本研究の学術的価値は、出来事をめぐる日常生活の語りと制度化された語りの差異を、オラリティの生まれる日常に引き戻すなかで、当事者の常なる現在を組み込んだ歴史記述の可能性を探りだしたことにある。また、「負の記憶」が持つ傷みを未来への転回点とし、オラリティに実践的な意味を持たせるうえで、記憶を凍結することなく、新たな解釈に開いていく重要性を指摘したことに社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：It is difficult to talk about negative memories such as the war and the pollution. When people narrate rather than remain silence about such experiences, and when their stories are written down, the meaning of their experiences are shared and constructed into public memories. However, once the oralities of such movements are socially accepted, they are fixed as a "type," preventing the next narratives from being told.

In this study, we focused on the fact that the type of oralities are bound by time and society, and revealed the dynamism of their authenticity and fluidity as they are recombined from a concrete field. We also revealed here that this dynamism will be "the commons of future history".

研究分野：社会学、環境社会学

キーワード：オラリティ リテラシー 負の記憶 パブリック・メモリー 負の記憶 スティグマ

1. 研究開始当初の背景

声によってつくられる文化はオラリティ、文字によってつくられる文化はリテラシーと対比的に定義されるが、両者は対立するものではない。話し手と聞き手が相互作用しながら生み出される「聞き書き」や「オラル・ヒストリー」は、物語られる出来事を文字に写し取ってきた。オラリティがリテラシーに転化するときには、話し手の生活世界の現実——地理や風土、慣習や習俗への理解、経験をめぐる了解の仕方などは、聞き手が共有しうる文脈に翻訳されて提示される。ある時代に記録された経験は、次の時代に同じように共有されるわけではない。物語りのディテールが簡略化され、類型化され、ひとつの型に収斂すると、それが「正解」であるかのように反復され、コピーされ、出来事の多面性や固有性が置き去りにされることもある。個人的な経験でありながら、社会的な記憶になった出来事は、特にそうした傾向を免れ得ない。

戦争体験や公害経験は、当事者にとって、こうした経験はいまだに語り難い経験になっていることが少なくない。話者リテラシーの沃野にはまだまだ開示されていないオラリティが潜んでいる。聞き書かれた物語(narrative)が、その時代の文脈のなかでシンボリックな型を持つことで、その物語は定型的な語り(マスター・ナラティブ master narrative)として社会的な力を獲得する。個人的な記憶(プライベート・メモリー private memory)が、類似した出来事を体験した集団の共通の記憶(パブリック・メモリー public memory)となり、さらには公共の記憶(public memory)として立ち現れる。同時に、定型的な語りの構築と公共の記憶の創出は、複数形の声と物語を潜在化させることに一役買う。

他方で、苦痛を呼び起こし、新たな苦痛を招き寄せるような経験は、記憶は想起を必要とするがゆえに記憶を拒む。語り難い経験がフォーマルに語られ、そこで聞き取られた声は文字化されることで、個人的な経験の意味が共有されて当事者集団に共通する記憶となり、社会にとって有意義な公共の記憶になっていく過程には、当事者運動や社会運動が介在する。公共の記憶は、「運動のオラリティ」として構築されるのである。

ただし、「運動のオラリティ」はその時代、その社会の文脈から自由ではない。ある時代、ある社会に拘束された「運動のオラリティ」は、オラリティを不自由にする。のみならず、硬直化した「運動のオラリティ」は、当事者である人々の沈黙を促し、排除し、ともすれば対立の火種となりかねない。こうした状況に直面したとき、「運動のオラリティ」は再構築を迫られることになる。

本研究は、なぜオラリティは不自由になるのか、どうしたらオラリティを拓くことができるのかを具体的なフィールドから考察することにあつた。

2. 研究の目的

本研究は、定型化された「運動のオラリティ」が再構築を迫られる具体的な事象に着目し、また語り部の「語り」の可変性について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

戦争、公害、社会的コンフリクトをもたらした出来事などの具体的な事例研究のなかから、オラリティのダイナミズムを探り出した。

4. 研究成果

今日、語り部とは、資料館や博物館で語り部としての属性を持ち、あるいは社会のなかで既に承認された体験と価値を語ることが予期される、制度化された語り部を指すことが多い。戦争や公害、災害といった「負の記憶」を展示する祈念館や資料館では、語り部の固有の生に触れながら出来事の教訓を学び、「未来への道徳」を学ぶことが出来る。語り部制度は、体験した者と体験していない者という区分を前提にしており、語り部と聞き手の関係は固定されている。そのなかで聞き手は、社会的に構築され、共有され、制度化された体験と体験を保存する価値を再確認するのだが、同時に聞き手は「負の記憶」の外側で三人称のままであることが可能になる。また、語り部と聞き手の間には、記憶と語りをめぐる「解釈と倫理」の問題が立ちあがる。

役割の固定化は、一方通行の知識の伝達になる。しかし、語り聞くオラリティの力と、文字化し読み解くリテラシーの力は、どちらも閉鎖系でなく開放系である。文字や映像に凍結された記憶とは異なり、語りや語られる記憶は<いま・ここ>にある相互作用のなかで変化していく。だからこそ、オラリティの分析は、常なる解釈の修正、改定、刷新のプロセスを含んだ「対象への見取り図認識=自己の認識枠組み理解」となるのである。

戦争、公害や環境問題、災害経験やマイノリティの当事者性などにかかわる語りは、現在社会が描き得る未来への道標として記憶し、教訓化され、そのままに引き継がれるべきものと意味づけられてきた。だが、語る主体の高齢化や世代交代は、無意識に前提にしてきた語りの真正性と不変性を揺さぶっている。

本研究は、オラリティとリテラシーという構図自体が、手話や点字などを無自覚に排除する図式に絡めとられがちであることを自覚しながらも、定型化された語りから零れ落ちるもの、ノイ

ズとして排除されること、語る主体への役割期待がもたらす当事者性の呪縛、語りを継承する困難、さらには語り手と聞き手の間にある「伝わらなさ」の現在を明らかにし、以下のような結論を得た。

(1) 発話行為の力

「負の記憶」を語る体験者の高齢化と世代交代は、「語り」を記録するだけでは足りない。記録は「負の記憶」を保存するが、社会は語りを引き継ぐ存在を求めている。そこに、発話行為そのものが持つ「力」を見出すことができる。

(2) オラリティとリテラシーの言文乖離

負性を帯びた出来事に対して、当事者の現実世界のなかではさまざまな語りが生まれ、コミュニケーションされ、抗う力を獲得しようとする。出来事に対するオラル・プロテストが、社会運動を通じて抗議の声となり、文字に定着されていく。制度化される以前の語りは、<加害 被害>関係や<差別 被差別>関係がある出来事においては、被害者の訴えであった。

だが、当事者のオラリティ全てが文字化され、制度化されるわけではない。外部から期待されるオラル・プロテストの言説が、内部で生成された「空気」に抵触するとき、オラリティは当事者を二分する。「負の記憶」を語る「語り部」として聖性を持つ主体が、内部ではスティグマを持つ者として排除されることがある。反対に、自らが経験したことと「負の記憶」との間に「ズレ」がある場合には、外部から期待されていない（もしくは知られていない）が、個別具体的な文脈において重要な生活のオラリティが排除され、当事者を抗いではなく沈黙へといざなうこともある。語りが文法を持つか、ノイズとして排除されるかは、語りの地域固有の文脈や当事者を取り巻く人間関係、社会関係に拠っている。饒舌と沈黙を分かつのは、その時代、その社会の文脈をどう了解し、自己を位置付けるかという点に負うところが大きい。

(3) 排除と構築の力

オラリティとリテラシーからみえる世界自体にも、排除と構築の力が働くことも見のがせない。オラリティは声を聞く力（聴力）、リテラシーは文字を読む力（視力）を前提にしており、点字や手話などそこからはみ出していく文化の独自性や多様性に無自覚になりがちである。

本研究は、オラリティを起点にして、オラリティとは異なる経験と記憶の居場所を探るところへとたどり着いた。それぞれのフィールドから、出来事をめぐるオラリティが制度化され、硬直化し、当事者に背を向け始める状況を捉えた。そして再び、その出来事をオルタナティブな当事者のオラリティの世界に引き戻し、常なる現在を含みこんだオラリティへと再構築する必要性と可能性を見いだした。「負の記憶」をめぐる傷みを未来の回転軸にするために、そしてオラリティに実践的な意味を持たせるために、本研究が果たした役割は大きい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計36件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 関礼子	4. 巻 27
2. 論文標題 法廷を鏡にして社会学を考える 福島原発事故避難者訴訟の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 26-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関礼子	4. 巻 2499
2. 論文標題 農村のことは先ず農民自らに聴かねばならぬ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 判例時報	6. 最初と最後の頁 136-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子祥之	4. 巻 68(1)
2. 論文標題 森林の放射能汚染と村落社会 福島県川内村における山野と集落の関係史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 林業経済研究	6. 最初と最後の頁 12-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹野清人	4. 巻 63-10
2. 論文標題 外国人の健康と労働環境	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保険の科学	6. 最初と最後の頁 664-668
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹野清人	4. 巻 1977
2. 論文標題 『入管法改正』再審：新たな在留資格「特定技能」の評価と日本の外国人受入れの限界」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 労働法律旬報	6. 最初と最後の頁 6-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮内泰介	4. 巻 755・756
2. 論文標題 書評 井上ゆかり著『生き続ける水俣病 - 漁村の社会学・医学的実証研究』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	6. 最初と最後の頁 128-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高崎優子	4. 巻 27
2. 論文標題 環境社会学における東日本大震災への「応答」をめぐる論点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 278 - 281
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 廣本由香	4. 巻 27
2. 論文標題 実践コミュニティの環境創出：沖縄県石垣市一般廃棄物処理施設立地から延命化計画への過程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 209- 224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋若菜、清水奈名子、高橋知花	4. 巻 53
2. 論文標題 看過された広域避難者の意向(3)新潟・山形・秋田県のエビデンスから見た支援策の批判的検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宇都宮大学国際学部研究論集	6. 最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋若菜	4. 巻 14-2
2. 論文標題 解消されない広域原発避難 民間借上げ仮設住宅停止以降、何が起きているのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境経済・政策研究	6. 最初と最後の頁 58-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関礼子	4. 巻 63
2. 論文標題 「ふるさと剥奪」と「ふるさと疎外」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 応用社会学研究	6. 最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 関礼子	4. 巻 25-11
2. 論文標題 人と環境とコミュニケーション：災害の記憶と履歴化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 49-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丹野清人	4. 巻 13
2. 論文標題 「外国人の人権」再審：在留資格の歴史社会学からアプローチする同性婚国際カップルの法的保護	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 理論と動態	6. 最初と最後の頁 98-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹野清人	4. 巻 84-6
2. 論文標題 多文化共生と外国人の健康福祉	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 公衆衛生	6. 最初と最後の頁 382-387
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹野清人	4. 巻 12
2. 論文標題 地方から始まる外国人の新しい受入れ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 移民政策研究	6. 最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 好井裕明	4. 巻 64-3
2. 論文標題 見えない恐怖と差別する可能性：新型コロナウイルス感染をめぐる差別や排除をめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 部落解放	6. 最初と最後の頁 122-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 好井裕明	4. 巻 64-3
2. 論文標題 ”ヒロシマの声”を聞くことをめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 137-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋 若菜 , 清水 奈名子 , 濱岡 豊	4. 巻 13-1
2. 論文標題 福島原発震災による健康・生活影響評価調査の問題点:エビデンス構築に向けた課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環境経済・政策研究	6. 最初と最後の頁 62-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14927/reeps.13.1_62	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋 若菜 , 清水 奈名子 , 高橋 知花	4. 巻 50
2. 論文標題 看過された広域避難者の意向(1)新潟・山形・秋田県自治体調査に実在したエビデンス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮大学国際学部研究論集	6. 最初と最後の頁 43-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋 若菜 , 清水 奈名子 , 高橋 知花	4. 巻 51
2. 論文標題 看過された広域避難者の意向(2)福島県全国調査と新潟・山形・秋田県調査の比較から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宇都宮大学国際学部研究論集	6. 最初と最後の頁 43-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子祥之	4. 巻 55
2. 論文標題 「農業雑誌」にみる佐久間義隣の農業観：災害を生き抜く生業の模索と提案	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 農業史研究	6. 最初と最後の頁 97-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子祥之	4. 巻 63
2. 論文標題 福島県川内村小田集落の儀礼文書(一)：山之神講文書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史と文化	6. 最初と最後の頁 1-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子祥之	4. 巻 85
2. 論文標題 東日本大震災と変わりゆく生活文化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BIOCITY	6. 最初と最後の頁 30-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関礼子	4. 巻 12
2. 論文標題 SDG'sのための社会再考 消える学校と持続可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環境思想・環境教育	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹野清人	4. 巻 16
2. 論文標題 外国人の「シティズンシップ」：行政運用と社会運動の間に生まれる市民権	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福祉社会学研究	6. 最初と最後の頁 13-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11466/jws.16.0_13	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丹野清人	4. 巻 265
2. 論文標題 「出入国管理及び難民認定法」改正と日本の外国人労働者：外国人の受入れを社会学から考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊労働法	6. 最初と最後の頁 57-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹野清人	4. 巻 22
2. 論文標題 日本の外国人受け入れ政策の本質：外国人どもは死なぬように生きぬように	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 貧困研究	6. 最初と最後の頁 57-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋若菜・小池由佳	4. 巻 28
2. 論文標題 原発避難生活史：山形編(1)事故から本避難に至る道：原発避難者訴訟の陳述書をもととした量的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宇都宮大学国際学部研究論集	6. 最初と最後の頁 59-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋若菜・小池由佳	4. 巻 49
2. 論文標題 原発避難生活史：山形編(2)避難生活と帰還、不確かな将来：原発避難者訴訟の陳述書をもととした量的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮大学国際学部研究論集	6. 最初と最後の頁 79-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松村正治	4. 巻 83(1)
2. 論文標題 低成長時代に都市近郊の里山で仕事をつくる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 24-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木聡子	4. 巻 104
2. 論文標題 公害反対運動の現在 名古屋新幹線公害問題を事例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学研究	6. 最初と最後の頁 63-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関礼子	4. 巻 24
2. 論文標題 震災リフレクション・遠隔地避難で生まれたユートピアとレジリエンスの『物語』 原口弥生氏の書評 に就いて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 222 ~ 226
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木聡子	4. 巻 24
2. 論文標題 環境社会学と「社会運動」研究の接点 　いま環境運動研究が問うべきこと	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 8-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木聡子	4. 巻 53
2. 論文標題 ドイツ・ヴァッカーズドルフの模索 　原子力施設を拒むということ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ドイツ研究	6. 最初と最後の頁 22-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子祥之	4. 巻 47
2. 論文標題 川内村における正月行事の変化 　近代化・震災を契機とした生活変容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福島の民俗	6. 最初と最後の頁 41-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子祥之	4. 巻 74
2. 論文標題 災異を遊ぶ心性と技法 　洪水時のマイナー・サブシステム論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活文化史	6. 最初と最後の頁 1111 1111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計31件（うち招待講演 13件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Seki Reiko
2. 発表標題 Deprivation of Hometown: Evacuees 10 years after the Fukushima Nuclear Power Plant Accident
3. 学会等名 Center for Japanese Studies University of California Berkeley “Ten Years Since 3.11”（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 関礼子
2. 発表標題 ふるさと剥奪被害の現在 社会学の視点から
3. 学会等名 日本法社会学会ミニシンポジウム「福島原発事故と社会科学 10年間の振り返りとこれから」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Seki Reiko
2. 発表標題 Niigata Minamata Disease 1964-2021: Social Exclusion, Hidden Victims and the Power of “Fork Culture Revisionism”
3. 学会等名 The Sixth Biennial Conference of East Asian Environmental History(EAEH)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子祥之
2. 発表標題 森林の放射能汚染と村落社会 福島県川内村における山野と集落の関係史
3. 学会等名 林業経済学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子祥之
2. 発表標題 原発災害被災地における集落共同の変質 冠婚葬祭からみた集落の選択と苦難
3. 学会等名 東北社会学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木聡子
2. 発表標題 上手な運動の終い方？ 承認のオラリティ
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯嶋秀治
2. 発表標題 「視覚障害」研究の拓く世界 - 近代国民国家空間の死角から
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯嶋秀治
2. 発表標題 口承を超える民俗学 - 視覚障害研究から
3. 学会等名 日本民俗学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松村正治
2. 発表標題 被害者の「語り」が生む連帯と分断：闘うオラリティ カネミ油症の事例から
3. 学会等名 日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高崎優子
2. 発表標題 私はなんであるか？：差別のオラリティ
3. 学会等名 日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高崎優子
2. 発表標題 創造的復興とグリーンインフラ
3. 学会等名 環境社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高崎優子
2. 発表標題 『十三浜小指 八重子の日記』にみるコミュニティ実践
3. 学会等名 日本村落研究学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣本由香
2. 発表標題 つながり の家族戦略 『 つながり の戦後史：尺別炭砒閉山とその後のドキュメント』を読む
3. 学会等名 環境社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 廣本由香
2. 発表標題 失われゆく風景 空間を読み解くオラリティ
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣本由香
2. 発表標題 若者の実践コミュニティ：石垣市住民投票運動のフレーミングをめぐって
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shuji IIJIMA
2. 発表標題 Sensory Impairment or Alternative Way of Life: Participating the Blind World in Japan
3. 学会等名 International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高崎優子
2. 発表標題 環境社会学の理論と実践の社会的実装に向けて
3. 学会等名 環境社会学会（研究例会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 関礼子
2. 発表標題 生活と知の主体性 福島原発事故避難指示解除区域を例に
3. 学会等名 関西社会学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関礼子
2. 発表標題 ふるさと喪失 / 剥奪被害の実態と賠償の考え方
3. 学会等名 日本弁護士連合会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関礼子
2. 発表標題 観光の環境史を読み解く
3. 学会等名 日本観光研究学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丹野清人
2. 発表標題 先進諸国の外国人医療からの教訓
3. 学会等名 公衆衛生学会、結核病学会、国際医療学会（合同シンポジウム）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮内泰介
2. 発表標題 被災地住民にとってのコミュニティ再編とその重層性
3. 学会等名 環境社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮内泰介
2. 発表標題 ライフヒストリーから見るイワシ産業の地域史：長崎県雲仙市南串山町の事例から
3. 学会等名 地域漁業学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋若菜
2. 発表標題 広域避難と自治体～新潟県における避難者受入れ、三点検証と避難生活調査～
3. 学会等名 日本自治学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松村正治
2. 発表標題 「終わらない公害」問題へのアプローチ 水俣病とカネミ油症をめぐる現状から考える
3. 学会等名 環境社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子祥之
2. 発表標題 原発事故と自然資源利用
3. 学会等名 環境社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroyuki KAENKO
2. 発表標題 Change of Food Culture due to the Nuclear Hazard: Environmental Pollution and Local Community after the Great East Japan Earthquake
3. 学会等名 International Anthropology Workshop: Disaster Perceptions and Responses in Times of Global Upheaval (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丹野清人
2. 発表標題 外国人との共生のこれまでとこれから
3. 学会等名 群馬の医療と文化・言語を考える会シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青木聡子
2. 発表標題 ドイツ・ヴァッカーズドルフの模索：原子力施設を拒むということ
3. 学会等名 第34回日本ドイツ学会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 関礼子
2. 発表標題 原発事故と『生の一回性』 対立を超えていく『語り』から
3. 学会等名 日本社会学会テーマセッション
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 関礼子・廣本由香
2. 発表標題 原発と震災書評セッション『鳥栖のつむぎーもうひとつの震災ユートピア』
3. 学会等名 環境社会学会（研究例会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計18件

1. 著者名 高橋若菜編（藤川賢・清水奈々子・関礼子・小池由香）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 315
3. 書名 奪われたくらし 原発被害の検証と共感共苦	

1. 著者名 牧野修也編（中村圭・武田俊輔・矢野晋吾・夏秋英房・俵木悟・金子祥之）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 322
3. 書名 変貌する祭礼と担いのしくみ	

1. 著者名 渡邊登	4. 発行年 2022年
2. 出版社 新潟日報事業社	5. 総ページ数 70
3. 書名 再生可能エネルギーによる持続可能なコミュニティへの市民の挑戦 「おらってにいがた市民エネルギー協議会」の活動をめぐって	

1. 著者名 丸山康司・西城戸誠編（山下紀明・本巢芽美・相川高信・茅野恒秀・蔵田伸雄・山下英俊・寺林暁良・宮内泰介・高橋真樹・青木聡子他）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 新泉社	5. 総ページ数 371
3. 書名 どうすればエネルギー転換はうまくいくのか	

1. 著者名 好井裕明	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 88
3. 書名 「感動ポルノ」と向き合う 障害者像に潜む差別と排除	

1. 著者名 宮内 泰介、上田 昌文	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 286
3. 書名 実践 自分で調べる技術	

1. 著者名 Horie Takashi, Tanaka Hikaru, Tanno Kiyoto	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Trans Pacific Press	5. 総ページ数 230
3. 書名 Amorphous Dissent: Post-Fukushima Social Movements in Japan,	

1. 著者名 濱西 栄司、鈴木 彩加、中根 多恵、青木 聡子、小杉 亮子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 236
3. 書名 問いからはじめる社会運動論(なぜ成功・失敗する?どのように影響を与える? - ドイツの原子力施設反対運動から)青木聡子	

1. 著者名 好井裕明	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 255
3. 書名 他者を感じる社会学：差別から考える	

1. 著者名 丹野清人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉田書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 国籍の境界を考える【増補版】	

1. 著者名 丹野清人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉田書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 国籍の境界を考える 増補版：日本人、日系人、在日外国人を隔てる法と社会の壁	

1. 著者名 宮内泰介、金子祥之（菅豊・北條勝貴編、中澤克昭、俵木悟、西村明、市川秀之、及川祥平、加藤幸治、加藤圭木、石井弓、金菱清、川田牧人、西村慎太郎、小山亮、村上忠喜、後藤真、渡邊英徳、塚原伸治、飯田高誉、青原さとし、今井友樹）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 479
3. 書名 パブリック・ヒストリー入門 - 開かれた歴史学への挑戦（「八重子の日記」をめぐる歴史実践」宮内泰介：「歴史」を回す オビシャ行事とオニッキをめぐる歴史実践」金子祥之）	

1. 著者名 青木聡子（長谷川公一編、李 妍ヤン、帯谷博明、高橋知花、中川恵、朝井志歩、土田久美子、金明秀、大井慈郎、小杉亮子、山本薫子、篠原千佳、伊藤綾香、板倉有紀、本郷正武）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 392
3. 書名 社会運動の現在 市民社会の声（「原子力施設をめぐる社会運動」青木聡子）	

1. 著者名 足立 重和、鳥越 皓之、金菱清編（金子祥之、「放射能汚染が生む交換不可能性と帰村コミュニティ 福島県川内村における自然利用と生活互助のいま」	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 539
3. 書名 生活環境主義のコミュニティ分析 環境社会学のアプローチ	

1. 著者名 康潤伊、鈴木宏子、丹野清人編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 216
3. 書名 わたしもじだいのいちぶです 川崎桜本・ハルモニたちがつづった生活史	

1. 著者名 関礼子、高木恒一編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 184
3. 書名 多層性とダイナミズム 沖縄・石垣社会の社会学	

1. 著者名 大場 茂明、大黒 俊二、草生 久嗣編（青木聡子、「原子力施設立地をめぐる対抗的“合同生活圏”の形成 ドイツの事例から」）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 254
3. 書名 文化接触のコンテキストとコンフリクト	

1. 著者名 奥村隆編 (岡崎弘樹、土屋葉、吉沢夏子、杉浦浩美、関礼子、三井さよ、工藤保則、岩間暁子、小川伸彦、水上徹男、生井英孝、高木恒一、深田耕一郎)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 306
3. 書名 はじまりの社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://www2.rikkyo.ac.jp/web/reiko/ オラリティ研究会 https://www2.rikkyo.ac.jp/web/reiko/orality/ 「オラリティ研究会」HP (立教大学社会学部関礼子研究室) https://www2.rikkyo.ac.jp/web/reiko/orality/ オラリティ研究会 http://www2.rikkyo.ac.jp/web/reiko/orality/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	金子 祥之 (KANEKO Hiroyuki) (10758197)	東北学院大学・文学部・准教授 (31302)	
研究分担者	宮内 泰介 (MIYAUCHI Taisuke) (50222328)	北海道大学・文学研究院・教授 (10101)	
研究分担者	渡邊 登 (WATANABE Noboru) (50250395)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	丹野 清人 (TANNO Kyoto) (90347253)	東京都立大学・人文科学研究科・教授 (22604)	
研究分担者	好井 裕明 (YOSHII Hiroaki) (60191540)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究分担者	飯嶋 秀治 (IIJIMA Syuji) (60452728)	九州大学・人間環境学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	松村 正治 (MATSUMURA Masaharu) (90409813)	恵泉女学園大学・未登録・研究員 (32694)	
研究分担者	青木 聡子 (AOKI Soko) (80431485)	名古屋大学・環境学研究科・准教授 (13901)	
研究分担者	高橋 若菜 (TAKAHASHI Wakana) (90360776)	宇都宮大学・国際学部・教授 (12201)	
研究分担者	廣本 由香 (HIROMOTO Yuka) (90873323)	法政大学・その他部局等・特別研究員 (32675)	
研究分担者	高崎 優子 (TAKASAKI Yuko) (70873339)	北海道教育大学・教育学部・講師 (10102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------